

つる云々、

〔慶長見聞集^四〕當世男髭なき事

見しは昔愚老若き比關東にておのこのひたひ毛頭の毛とは、髮刺にてもぞらず、けつしきとて、木を以てはさみを大にこしらへ、其けつじき頭の毛をぬきつれば、かうべより黒血流て、物すさまじかりしなり、頭はふくべの如しとて、毛のなきを男の本意とす、扱髭はへたる男をば、面にく體髭男と云てほむる、皆人ひげを願ひ給へり、略○中ひげはへたる人は、自慢顔して、氣晴ては風新柳の髪を梳と作れる詩の心も面白し、昔頼義、貞任宗任を責られしとき、度々におよんで、十人の首を髭共に切たる劔あり、故に髭切と名付、源氏重代の寶劔、奥州の佳人文壽といふ鍛冶鑄たり、此等も髭のいとくならずやなど、いひて、明くれ髭をなであげて、おろしひねり給ひける、又ひげはへぬをば、おんな面と云て、あざらひ笑ふ、催馬樂に、けふくなうとは、髭なきとも有、万葉に、かつまたの池はわれしる蓮なし、まかいふ君が髭なきがごとく、とよめり、然るに髭はへぬ男は、一期の片輪に生れけることの無念さよ、女づらを見らる、口惜さよと、人の餘所ごといふをも、我髭のことが、はづかしさの、おもひ内にあれば、色顔にあらはる、されば天正の頃ほひに、小田原にて、岩崎嘉左衛門、片井六郎兵衛といふ者、ざれ言を云あがりていさかふ、嘉左衛門に髭なし、六郎兵衛あの髭なしと悪口しければ、即時にさしちがへ死たり、さる程に男たる人の髭なしといはる、は、をく病ものといはる、ほどのちじよくと思ひたまへり、故に髭なき男は、あはれ髭はゆるものならば、身を走るかへて、毛髪をはへさせばやと願ひたり、此十四五年此方頭に毛のなきを、年寄のきんかんつぶり、はへすべりなど、あだ名を云て、若き人たち笑ふ、扱髭はへたるつらは、どんなるつら、えぞが島の人に、よく似たりといひならはし、上下の髭を殘さず、毛抜にてぬき捨る、然間笠を著、頭包たる人を見れば、法師とも男女とも見分がたし、されどもむかしに返る事